

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会 〒136 東京都江東区 夢の島3-2 都立第五福竜丸展示館内 電話 03-3521-8494



福竜丸に学ぶ

## 第五福竜丸建造の地で平和祭

谷口克郎

和歌山県東牟婁郡古座町。紀伊半島の先端、潮岬の隣に位置する、人口六千人足らずの小さな田舎町です。今から四九年前、第五福竜丸は、この町の造船所で産声をあげました。かつては林業、漁業を中心に栄えたこの町も、現在は両基幹産業の衰退もあって過疎化が著しく人口が大幅に減少しています。この町で、昨年十月十五日、古座古座川平和祭(郷土芸能祭)の野外イベントが開催されました。取組みは昨年六月から、高等学校教職員組合の古座高校分会と串本高校分会が中心になって、地元にも広く呼びかけ、県教職員組合東牟婁支部、古座川地区労働組合協議会、古座川町青年団、その他有志の参加による実行委員会が結成され、はじまりました。取組みの目的として、①戦後五十周年にあたり、平和に関する催しをする。②過疎化の進む郷土をもう一度見直すべく、郷土芸能の祭典を開くこと、などが決められました。当初、実行委員会では平和祭の会場候補地として、古座川の中州を考えていました。現在、古座川

には幅百五十メートル、長さ一キロほどの中州がありますが、荒地となっており、もちろん住む人もおりません。しかし、三十数年前、上流にダムができるまでは、と大きな中州で、そこには製材所・造船所(二百五十トンの船を四艘ならべて建造できたといわれます)・カフェーなどがあり、運動会やサーカスの公演ができるほどのスペースもあったそうです。いわば、かつての古座の町の繁栄の象徴ともいえる場所だったのです。第五福竜丸は、この中州の造船所で、昭和二十二(一九四七)年に建造されました。建造の際、設計主任を務めた南藤藤夫氏は、現在もお古座町で健在です。この、「第五福竜丸」建造の地である古座川中州で平和祭をおこなうことは、中国・フランスの核実験再開という情勢の中で、大きな意義があるのではないかと、私たち実行委員会では考えました。しかし、現在、中州に渡る方法はなく、仮設橋をかけることなども検討しましたが、費用の面で折角がつかず、結局、九月初めの時点

で、同じ古座町の田原地区の海水浴場に会場を変更することになりました。さらに、中州・「第五福竜丸」へのこだわりから、映画「第五福竜丸」(昭和三十三年・新藤兼人監督)の上映会も、平和祭の一環として企画されました。十月十五日の古座古座川平和祭は、幸い好天に恵まれ、約千人の観客が集まりました。郷土芸能祭は、夕方より、海岸に設置された野外ステージの上で、教員有志によるロックバンドの演奏によって開幕。次いで古座川町高池地区、古座町古座地区の獅子舞が、夕陽と白波をバックに美しく繰り広げられました。日没後も、スポットライトが波打ち際を照らした幻想的な演出の中、日本舞踊、カラオケ発表、近隣の大地町の鯨太鼓演奏などの催しが続けられ、最後には古座町西向地区、地元田原地区の獅子舞が上演され、会場は大きな拍手につつまれました。舞台行事と並行して、午後六時から駐車場を利用した野外映画会場でアニメ映画「ひめゆりの塔」の上映。たくさんの子どもたちが熱心に見てくれました。また、会場内では戦争パネル展示もおこない、多くの入場者が興味深げに見入っていました。

映画会の方は、イベントの一週間後、十月二十一日、古座川中州を見下ろす古座町役場を会場としておこなわれました。映画は、新藤兼人監督によるセミドキュメンタリータッチの作品で、宇野重吉扮する久保山愛吉氏を中心に、「第五福竜丸」のビキニでの被爆の様子や、その後の周囲の対応などが克明に描かれたものでした。久保山氏の最後の言葉「身体の下に高圧線が通っている」に、あらためて核爆弾の恐ろしさを認識させられました。今回、初めての古座古座川平和祭の取組みの中で、私たちは、あらためて郷土・古座の歴史を見直し、これからの郷土のあり方について考えるきっかけを見つめました。また、「第五福竜丸」について知る中で、核の恐ろしさを再認識しました。すでに実行委員会の中では、核廃絶と平和への願いをこめて、古座川中州に、「第五福竜丸建造の地」の石碑を建立する運動をはじめようという声もあがっています。そのためにも、この平和祭を今回だけで終わらせることなく、ねばりげよく続けて輪をひろげていこうと、私たちは考えています。(古座古座川平和祭実行委員会)

## 新年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

新年おめでとうございます。本年は、第五福竜丸展示館が開館して二十周年に当たります。高齢化社会と生涯学習、少子化への対応・工夫など、いま、教育のあり方がいろいろなる角度から注目されています。政府の施策でも、教育は、未来への先行投資として、重要な位置づけを与えられ、学校教育では、画一的なものに代って、多様化と個性をのびす教育が推奨されています。当協会は、ある意味で、社会教育・平和教育の一端を担っているわけですが、新しい世代にたいする期待が大きいだけに、若い人びとがどのような考え方をもち、どのような方向に育っていくか、大きな関心を寄せています。ますます複雑化し高度化する情報化社会・国際化時代は、どのような人間を求めているのでしょうか。国際競争に耐えるためには、フルコースではなく、最小限必要な内容を精選して、アラカルト方式で短期間に学ばせ、可能なかぎり早く社会でのスタートラインに立たせるべきだと、とする意見に代表されるように、概して、知識やテクニックの効率的な修得に重きをおくものが、多いように思えます。しかし、私は、それにもまして重要なのは、豊かな人間性、他人への思いやり、多様性を認め尊重すること、異なる価値観や文化とも協調・協働できること、人から教わるだけでなく自己啓発力をつけることなど、精神面・人格面だと考えます。今日のテンポの早い生活の下で、大人たちだけでなく、子どもたちまでもが、のびのびとした雰囲気の中で自分自身を見つめ直したり、人間のあり方を深く考える、機会・余裕を奪われているのが実情です。第五福竜丸にじかに触れていただくことは、平和の尊さをわかっただけでなく、日本と世界とのつながりや、人類の一員としての自分と責任についても、省みる契機を与えてくれます。第五福竜丸展示館の管理・運営をあく責任の重さをかみしめ、本年も、来館される方々をはじめ支えて下さる多くの人びととともに、平和の心をひろく育むために微力を捧げたいと思っております。ひきつづきご支援、ご鞭撻を願います。皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

ビキニへの道

核兵器大型化の終着駅

小川 岩雄

ソ連の核保有に對抗して米国は一九五二年十一月に「切り札」だった史上最初の水爆実験を中部太平洋で行なったが、翌五三年には早くもソ連も水爆実験に成功し、米国の核優位を脅かした。そこで米国が実施に踏み切ったのが「究極の大型核兵器」とでもいふべき3F型水爆の実験である。これこそ第五福竜丸の被災を招き、マーシャル諸島の住民に重大な被害をもたらした五四年三月一日のビキニ環礁での「ブラボー・ショット実験」であった。

3F型水爆というのは、核分裂(Fission)爆弾で重水素などの核融合(Fusion)反応を起こさせる通常の水素爆弾の周りを、さらに天然ウランかまたは「減損ウラン」(天然ウランから原爆用核燃料であるウラン二三五を分離した残り)で取り囲んだもので、水爆で生じる多数の高速中性子を天然または減損ウランの主成分ウラン

二三八に当てて核分裂(Fission)を大量に起こさせる点が新しい。Fission、Fusion、Fissionの三段階を利用するので3F型と言う。原爆では核分裂で出る中性子のエネルギーがあまり高くないのでウラン二三八の核分裂はほとんど利用できず、二三八は貴重な中性子を「むだ喰い」する邪魔物として極力取り除く(つまり核分裂し易いウラン二三五を高度に濃縮することが必要だった)。

ところが水爆の核融合反応で出る中性子はエネルギーが十倍も高いため、天然ウランの大部分を占めるウラン二三八が全部核分裂性と見なせる。そこで水爆の周りを天然または減損ウランの層で被うことによって、爆発による放出エネルギー(いわゆる破壊力)を飛躍的に増大させることができ、しかも費用も安く特別な技術も必要としない。その上ウランは鉛の二倍近く重い物質なので、爆発の初

期にまだ反応していない核爆薬が吹き飛ばされるのを防ぐ役割も果たす。非常に巧妙な発明だった。

ブラボー・ショットでは出力はTNT(普通の火薬)の約一五メガトン(千五百万トン)に相当し、広島原爆の約一、二〇〇倍であったと言われる。この原理はむしろ米国は機密にしていたが、わが木村健二郎博士(故人・当時は東大教授)らの研究グループは、採取した「死の灰」の放射化学分析の結果から、ブラボー・ショットは3F型爆弾の実験ではなかったと推定し、米国を驚かせたのであった。

さて核分裂の生成物は核融合の生成物と異なり、強い放射能を示す。そのため3F方式ではウラン二三八の分裂生成物の分だけ放射性の降下物(「死の灰」)が多くなり、万一使用されれば放射線障害の犠牲者が著しく増大し、実験ですら環境の大規模な放射性汚染を引き起こす。そこでこのような水爆のことを、普通の水爆(「きれいな」爆弾)と比べて「汚い爆弾」と呼ぶ。それが現実のものとなったのがビキニ事件だった。

実際ビキニではサンゴ礁の地表で爆発が行われたため、溶融して吹き上げられ凝固した大量の炭酸

カルシウムなどの微粒子が、核分裂生成物などの強い放射性物質を付着した状態で、直径数百キロに及ぶ広大な海域に降下し、またロングラップ島などマーシャル諸島北端部の諸島の地表や建物、植物などを被(おお)い尽くした。

その結果、数百人の島民が激しい放射線障害に苦しみ、死者も出したほか、爆発地点の東方一六〇キロ(ほぼ東京―静岡間に相当)も離れた海域で操業中のマグロ漁船第五福竜丸も「甲板全体が真っ白になるほどに」灰に被われ、二十三人の乗組員全員が頭痛、脱毛、吐き気、下痢、皮膚のただれなどの急性放射能症を示し、最も重症だった無線長の久保山愛吉さんは六ヵ月後に死去した。

その後ソ連もまた水爆の大型化を目指し、一九六一年にはTNT五〇メガトン相当の通常水爆の実験を行っているが、この種の大型核兵器はミサイルによる運搬が難しく、破壊力が大き過ぎるなど、「使いにくい」ため、米ソとも実際には配備されず、結局は実験による威力の誇示に終わった。(立教大学名誉教授、本協会理事)

戦争を厳しく総括してこそ核は訴えられる

——第四回世界女性会議に参加して——

斎藤 千代

昨秋北京で開かれた第四回世界女性会議は、併設のNGOフォーラムを含めると五万人、一八八カ国からの参加を得て、平等・発展・平和が熱く論じられた。

折しも中国とフランスの核実験。抗議のために会議そのもののボイコットを、という声もあがったが、前回のナイロビ会議以来十年、討議したい問題は山積している。ボイコットするよりも会議の中でアピールしよう、私たちは署名を添えた抗議文を中国政府に提出するとともに、会場内でのデモ行進その他に参加した。NGOの熱烈なロビー活動にもかかわらず国連の決議からは最終的には核廃絶が除外されて残念だったが、核廃絶運動のあり方について考えさせられることの多い二週間だった。

予想されたように、フランスのNGOは核実験中止にストリートに共感したが、中国の民間人に伝えることは難しかった。中国でのデモや情宣活動は会場内でのみか許されず、中国からの参加者は公称五千人にすぎなかった。その五千人も、大部分は開会式などの行事だけで、ワークショップの参加者はその五分の一程度に感じられた。いずれも中国政府から特別の許可を得たいわば「優良国民」で、世界各国が考えるNGOとは異なっていたが、私たちへへが主催した五つの「女と戦争」のワークショップは、すべて中国語の通訳をつけたためか中国人の参加者が多く、七、八十人に達した会場もあり、質問も意見も老若各世代から活発に提示された。中でも最も多かった質問は「日本は本当に戦争をしない国になったのか」であり、中国が受けた傷の深さを改めて感じさせられた。

次に多かったのが、閣僚の靖国参拝に関するものだった。中国の人びとは、日本人は戦って死ねば神として祀られると信じて他国を侵し、殺し、焼き尽くしたと教えられている。靖国神社が今も存在すること自体許しがたいことに思われるのに、国の指導者である閣僚が参拝するということが戦意高揚にはかならないと受けとめられる。閣僚参拝の報道の度に鳥肌立つ思いとしていることがひしひしと感じられた。

訪日の経験をもち人たちからは日本の平和記念館のあり方を厳しく批判された。自国の被害のみが展示されて、加害の実状にも、侵略の原因にも全くふれられていないという指摘を聞くたびに、九段の平和記念館が現在の計画のまま建設されたなら、平和どころか紛争の種をまくことは間違いないと心痛した。

十日間の会期中、NGOフォーラムでは韓国のデモ隊が日本政府の慰安婦対策の不誠実を連日非難して歩き、慰安婦関連ワークショップも毎日三回は聞かれた。「ボイコットジャパン」のチラシを渡され、目も耳も覆いたくなるような残虐行為を繰返し証言されて、日本からの参加者たちは針のむしろに座る思い。中国の核を訴えれば、それに数十倍する非難が返ってくるのは明らかだった。